人吉・球磨
風水・祈りの津花町
日本遺産

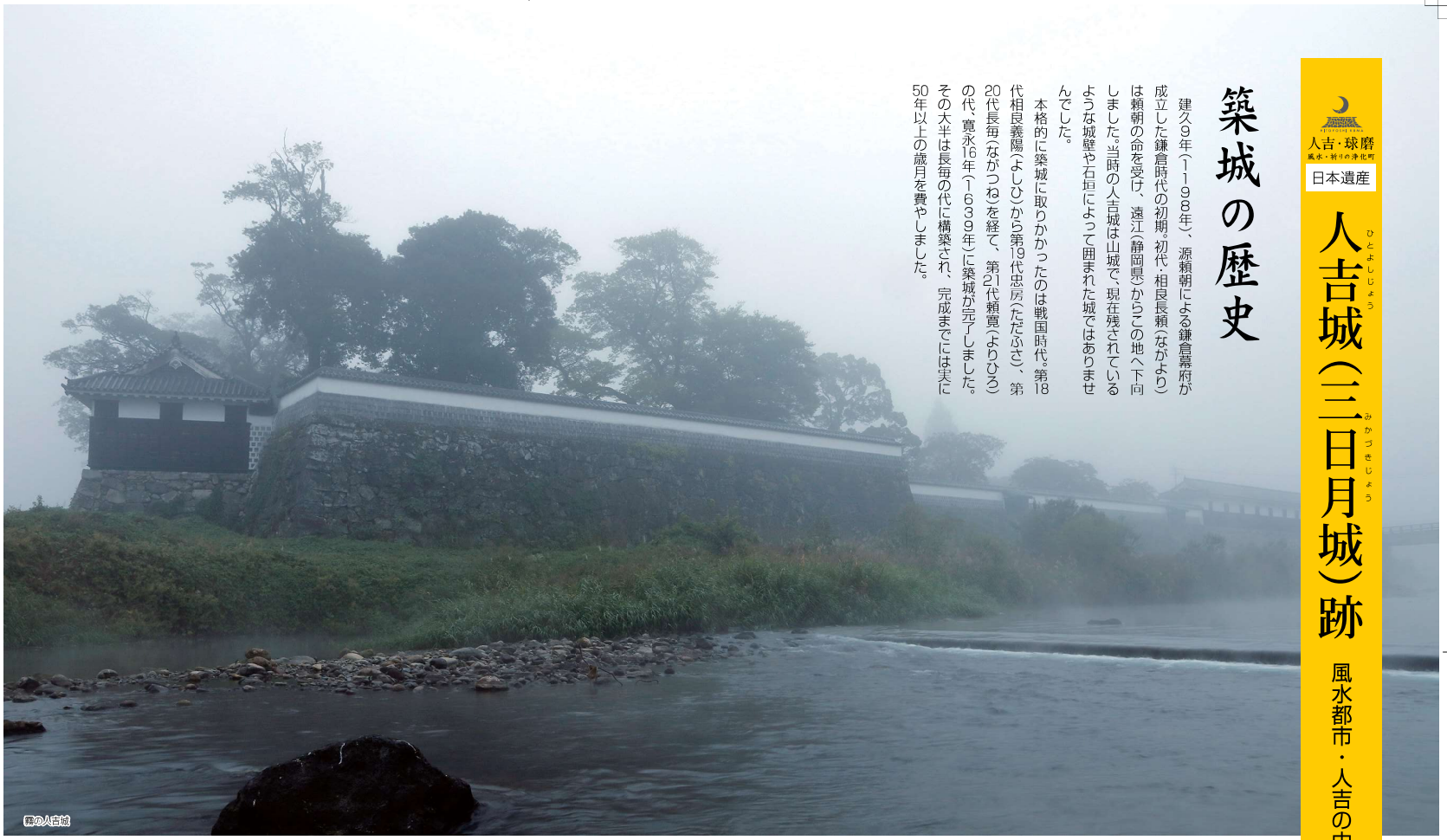
人吉城（三日月城）跡

風水都市・人吉の中心

築城の歴史

建久9年（1198年）、源頼朝による鎌倉幕府が成立した鎌倉時代の初期。初代・相良長頼（ながより）は頼朝の命を受け、遠江（静岡県）からこの地へ下向しました。当時の人吉城は山城で、現在残されているような城壁や石垣によって囲まれた城ではありませんでした。

本格的に築城に取りかかったのは戦国時代。第18代相良義陽（よしひ）から第19代忠房（ただふさ）、第20代長毎（ながつね）を経て、第21代頼寛（よりひろ）の代、寛永16年（1639年）に築城が完了しました。その大半は長毎の代に構築され、完成までには実に50年以上の歳月を費やしました。


霧の人吉城

「三日月城」別名「繊月城」

初代・相良長頼が人吉城の修築を始めたとき、城の西南隅から三日月形の文様のある石を発見しました。そのため、人吉城を「三日月城」または「繊月城」などと呼ぶようになったと伝えられています。

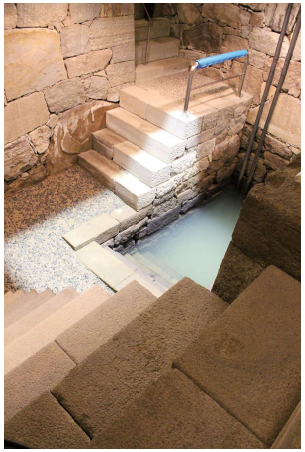
角櫓、長塀、多門櫓

鎌倉時代初期から明治2年（1869）の藩籍奉還まで、人吉球磨は一貫して相良氏によって治められてきました。数百年の長きにわたりある地域が一族によって統治された例は全国的にも珍しい（他に佐竹、伊達、上杉、宗、島津などに限られる）。

日本遺産

三日月城の謎
相良清兵衛屋敷の地下室

三日月城の敷地内には謎の地下室が見つかっています。6ｍ四方の大きさで、深さは約3.2m。出入り用の階段が２つあります。相良清兵衛（さがらせいべえ）という家老の屋敷の地下にあったことまでは判明していますが、その目的や用途はいまだ解明されていません。貯水場、井戸、風呂場、キリシタンに関する施設、ユダヤ教の沐浴施設、などさまざまな説が唱えられていますが、どれも断定には至っていません。



もっと知りたい！ 相良氏を語るとき、外せない2人の人物

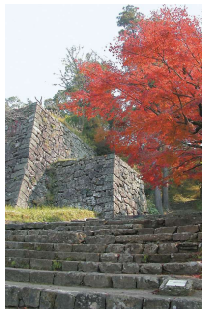
相良 義陽（よしひ）

戦国時代の真っ只中を生きた相良家18代当主（1544～1581年）。相良家歴史書「南藤曼綿録」には歴代の当主が記述されているが、その中で最も記述が多い。書によると、武に長け、風流で、部下思いの名君であったという。そして人吉城の改築にあたっては、自ら「御館」（現在の相良神社付近）の場所を決めたという。当時、八代・水俣芦北まで制圧していた義陽が、安土城や京都のような「強い城下町・都」を目指し、風水に基づく都市デザインを描いたのだろう。

相良 龍子（たつこ）

18代義陽が描いた風水都市・人吉は、息子である20代長毎の時代にほぼ完成する。その長毎の夫人が龍子である（1572～1634年）。秋月家（宮崎・高鍋藩）出身で「西国一の美女とも言われた彼女は、幼少期より波乱万丈の人生を歩んできた。風水や修験道、神道、仏教、そして隠れキリシタンの伝説までもち、「祈りの姫、三日月の城に住む姫」としてふさわしい。地域ブランド「三日月の姫」のモデルでもある。

はねだし石垣 別名 武者返し
御館の防火のために行われた石垣工事で採用された西洋式の石垣み。「武者返し」とも呼ばれ、江戸湾台場、函館五稜郭などの西洋式城郭に採用されている工法だが、人吉城のような古典的な城郭に採用されているのは日本唯一。



御下門跡
こちらは家来が通る門。昔の人は現代人と比べると背も低く足も短かったはず。この高い石段がよく登れたものです。

御館御門橋
御館への入口として豪に架けられた橋。年号（明和３年・1766）のわかる石造の桁橋では県内最古のもの。